熊野

世阿弥作

ワキ　平宗盛
トモ　従者
ツレ　侍女朝顔
シテ　熊野

地は　京都
季は　三月

ワキ詞「是は平の宗盛なり。さても遠江の国池田の宿の長をば熊野と申し候。久しく都にとゞめおきて候ふが。老母のいたはりとて度々いとまを乞ひ候へども。此春ばかりの花見の友とおもひ留めおきて候。いかに誰かある。

トモ詞「御前に候。

ワキ「熊野きたりてあらば此方へ申し候へ。

トモ「畏つて候。

ツレ次第「夢の間をしき春なれや。〳〵。咲く頃花を尋ねん。

サシ「是は遠江の国池田の宿。長者の御内に仕へ申す。朝顔と申す女にて候。

詞「さても熊野ひさしく都に御入り候ふが。此程老母の御いたはりとて。度々人を御のぼせ候へども。更に御下りもなく候ふほどに。此度は朝顔が御むかへにのぼり候。

道行「此程の。旅の衣の日もそひて。〳〵。幾夕ぐれの

宿ならん。夢も数そふ仮枕。明かし暮らして程もなく。都に早く着きにけり。〳〵。

詞「急ぎ候ふ程に。是は早都に着きて候。是なる御内が熊野の御入り候ふ所にてありげに候。まづ〳〵案内を申さばやと思ひ候。いかに案内申し候。池田の宿より朝顔が参りて候ふそれ〳〵御申し候へ。

シテサシ「草木は雨露のめぐみ。養ひ得ては花の父母たり。

況んや人間に於てをや。あら御心もとなや何とか御入り候ふらん。

ツレ詞「池田の宿より朝顔がまるりて候。

シテ詞「なに朝顔と申すかあらめづらしや。さて御いたはりは何と御入りあるぞ。

ツレ「以ての外に御入り候。是に御文の候ふ御覧候へ。

シテ「あら嬉しや先々御文を見うずるにて候。あら笑止や。此御文のやうも頼みずくなう見えて候。

ツレ「左様に御入り候。

シテ「此上は朝顔をも連れて参り。又此文をも御目にかけて。御暇を申さうずるにてあるぞこなたへ来り候へ。誰か渡り候。

トモ詞「誰にて渡り候ふぞ。や。熊野の御まるりにて候。

シテ「わらはが参りたる由御申し候へ。

トモ「心得申し候。いかに申し上げ候。熊野の御参りにて候。

ワキ詞「こなたへ来れと申し候へ。

トモ「畏つて候。此方へ御参り候へ。

シテ「いかに申し上げ候。老母のいたはり以ての外に候ふとて。此度は朝顔に文をのぼせて候。びんなう候へどもそと見参に入れ候ふべし。

ワキ「なにと故郷よりの文と候ふや。見るまでもなしそれにて高らかに読み候へ。

シテ「甘泉殿の春の夜の夢。心を砕く端となり。驪山宮

の秋の夜の月。終なきにしもあらず。末世一代教主の如来も。生死の掟をば遁れ給はず。過ぎにし二月の頃申しゝ如く。何とやらん此春は。年ふりまさる朽木桜。今年ばかりの花をだに。待ちもやせじと心よわき。老の鶯逢ふ事も。涙に咽ぶばかりなり。たゞ然るべくはよきやうに申し。しばしの御暇を賜はりて。今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世のなかなるに。同じ世にだに

添ひ給はずは。孝行にもはづれ給ふべし。唯かへすゞも命の内に今一度。見まるらせたくこそ候へとよ。老いぬれば去らぬ別のありといへば。いよ〳〵見まくほしき君かなと。古言までも思出の涙ながら書きとゞむ。

地「そも此歌と申すは。〳〵。在原の業平の。其身は朝に隙なきを。長岡に住み給ふ。老母のよめる歌なり。さてこそ業平も。さらぬ別のなくもがな。

千代もと祈る子の為と。よみし事こそあはれなれ。よみし事こそあはれなれ。

シテ詞「今はかやうに候へば。御暇を賜はり。東に下り候ふべし。

ワキ詞「老母の痛はりはさる事なれどもさりながら。この春ばかりの花見の友。いかでか見すて給ふべき。

シテ「御詞をかへせば恐れなれども。花は春あらば今に限るべからず。是はあだなる玉の緒の。ながき別

れとなりやせん。唯御暇を賜はり候へ。

ワキ「いや〳〵左様に心よわき。身に任せてはかなふまじ。いかにも心を慰めの。花見の車同車にて。ともに心を慰まんと。

地「牛飼車寄せよとて。〳〵。是も思ひの家の内。はや御出と勧むれど。心は先に行きかぬる。足よわ車の。力なき花見なりけり。

シテ「名も清き。水のまに〳〵とめくれば。

地「河は音羽の山桜。

シテ「東路とても東山。せめて其方のなつかしや。

地「春前に雨あつて花の開くる事早し。秋後に霜なうして落葉遅し。山外に山有つて山尽きず。路中に道多うして道きはまりなし。

シテ「山青く山白くして雲来去す。

地「人楽しみ人愁ふ。是れ皆世上の有様なり。

下歌「誰か言ひし春の色。げに長閑なる東山。

上歌「四条五条の橋の上。〳〵。老若男女貴賤都鄙。色めく花衣。袖を連ねて行末の。雲かと見えて八重一重。さく九重の花ざかり。名に負ふ春のけしきかな。〳〵。

ロンギ地「河原おもてを過ぎゆけば。急ぐ心の程もなく。車大路や六波羅の。地蔵堂よと伏し拝む。

シテ「観音も同座あり。闡提救世の方便あらたに。たらちねを守り給へや。

地「げにや守りの末すぐに。頼む命は白玉の。愛宕の寺も打ち過ぎぬ。六道の辻とかや。

シテ「実におそろしや此道は。冥途に通ふなるものを。心細鳥辺山。

地「煙の末も薄霞む。声も旅雁の横たはる。

シテ「北斗の星の曇りなき。

地「御法の花も開くなる。

シテ「経書堂は是かとよ。

地「其たらちねを尋ぬなる。子安の塔を過ぎ行けば。

シテ「春の隙行く駒の道。

地「はや程もなく是ぞこの。

シテ「車宿り。

地「馬留め。こゝより花車。おりるの衣播磨潟。飾磨の徒歩路清水の。仏の御前に念誦して。母の祈誓を申さん。

ワキ詞「いかに誰かある。

トモ詞「御前に候。

ワキ詞「熊野はいづくにあるぞ。

トモ「いまだ御堂に御座候。

ワキ「何とて遅なはりたるぞ急いでこなたへと申し候へ。

トモ「畏つて候。いかに朝顔に申し候。はや花の本の御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて候。其よし仰せられ候へ。

ツレ「心得申し候。いかに申し候。はや花の本の御酒宴

の始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて候。

シテ「何と早御酒宴の始まりたると申すか。

ツレ「さん候。

シテ「さらば参らうずるにて候。

シテ詞「なふ〳〵皆々近う御参り候へ。あら面白の花や候。今を盛と見えて候ふに。何とて御当座などをも遊ばされ候はぬぞ。

クリ「実にや思ひ内にあれば。色外に顕はる。

地「よしやよしなき世の習ひ。歎きても又余りあり。

シテサシ「花前に蝶舞ふ紛々たる雪。

地「柳上に鶯飛ぶ片々たる金。花は流水に随つて香の来る事疾し。鐘は寒雲を隔てゝ声の至る事遅し。

クセ「清水寺の鐘の声。祇園精舎をあらはし。諸行無常の声やらん。地主権現の花の色。娑羅双樹のことわりなり。生者必滅の世のならひ。実にためしある粧ひ。仏も元は捨てし世の。なかばゝ雲に上見

えぬ。鷲の御山の名を残す。寺は桂の橋柱。立ち出でゝ峰の雲。花やあらぬ初桜の。祇園林下河原。

シテ「南を遥かにながむれば。

地「大悲擁護の薄霞。熊野権現の移ります。御名も同じ今熊野。稲荷の山の薄紅葉の。青かりし葉の秋又。花の春は清水の。唯たのめ頼もしき。春も千々の花盛り。

シテ「山の名の。音羽嵐の花の雪。

地「深き情を人や知る。

シテ詞「妾御酌にまるり候ふべし。

ワキ詞「いかに熊野。一さし舞ひ候へ。

地「深き情を人や知る。（中の舞）

シテ詞「なふ〳〵俄に村雨のして花の散り候ふは如何に。

ワキ詞「げに〳〵村雨の降り来つて花を散らし候ふよ。

シテ「あら心なの村雨やな春雨の。

地「降るは涙か。降るは涙か桜花。散るを惜しまぬ人

やある。

ワキ詞「よしありげなる言葉の種取り上げ見れば。いかに

せん都の春も惜しけれど。

シテ「なれし東の花や散るらん。

ワキ詞「げに道理なりあはれなり。早々暇とらするぞ東に

下り候へ。

シテ「何御いとまと候ふや。

ワキ詞「中々の事。とく〳〵下り給ふべし。

シテ「あら嬉しや尊やな。是れ観音の御利生なり。是までなりや嬉しやな。

地「是までなりや嬉しやな。かくて都に御供せば。またもや御意の変はるべき。たゞ此まゝに御いとまと。木綿附の鳥が鳴く。東路さして行く道の。やがて休らふ逢坂の。関の戸ざしも心して。明け行く跡の山見えて。花を見すつる雁金の。それは越路我はまた。東に帰る名残かな。〳〵。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著